

# 軍事史学

第45巻 第4号

## 巻頭言

### 日中戦争のプリズム

マーク・ピーティ

本特集は日中戦争に関する「歴史的記憶」を考えるものである。一九三七年から一九四五年まで八年もの間続いた日中戦争は莫大な人的・物的損害をもたらした。日本軍の損害は数十万単位(約四一万人が死亡し、九二万人が行方不明・負傷)であり、中国軍人の犠牲は一五〇万に及んだ。信頼できる統計には欠けるが、中国の非戦闘員の被害はおそらく軍人の被害の二倍にも達したであろう。このような戦争は終わってから数十年がたっても、日本人の心理に衝撃を与え続け、中国人の公的記憶に深い傷を刻み込んでいるのである。

戦争当初の日本の「短期決戦」の目論見は外れ、一九三八年以降、日本軍は内陸に移転した国民政府との長期持久戦を余儀なくされた。日本は一貫性のある包括的な政戦略の確立に失敗し、近視眼的でその場しのぎの方策で中国を和平交渉のテーブルに引き出そうと無益な努力を重ねたといえるかもしれない。戦時首都・重慶への戦略爆撃、主要都市と幹線鉄道・道路の支配、蔣介石の国民政府に代わる合法性を有し、しかも日本が統制することが可能な新政権である汪兆銘政権の擁立は目標の達成に失敗した。

日本とは対照的に、国民政府は壮大だが単純明快な目標を持っていた。戦争の最終まで生き残り、戦後の国際社会において自立した中国を代表できるようになる、ということである。国民政府は時間と空間を味方につけて、日本軍を險しい地形と厳しい気候の内陸部に引き込み、日本の国力にはあまる兵站上の負担を日本軍に強いことによってこの目標を追求した。一九三七年から一九四一年まで四年間苦しい孤獨な戦いを続けた国民政府であるが、一九四一年十二月の日米開戦によって日中戦争を「民主主義諸国のファシズムに対する正義の戦争」の一部にすることに成功する。こうして米国という、日中戦争における新たな当事者が登場した。

この間、延安の毛沢東政権は軍事的には日本の侵略軍に対し、そして政治的正統性に関しても孤立していた。国民政府に対し有効な反撃を展開した。延安で一〇年近くも孤立していた毛沢東が立案した新戦術が「人民戦争」である。「人民戦争」は中国にいた日本軍を直接敗北に追い込む効果はなかったかもしれないが、抗日意識を高揚させ、自立した中国を戦争の終結まで維持することに貢献した。そして戦後の国共内戦において最終的な勝利をおさめる基盤を形成したのであった。

日中戦争という二〇世紀アジア最大の戦争は今も当事者たちにさまざまな記憶を供給し続けている。

(元スタンフォード大学フーヴァー研究所教授)

(等松春夫 訳)